

Title	Essai d'une histoire comparee des Peuples de l'Europe, par Ch-Seignobos(Paris, 1938)
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.183(523)- 185(525)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かく地球であるため、世間一般にはその存在が比較的に華々しく
ないから、その意味でも斯うして従來の史的研究の成果を根據
に、さうした人々のことをやさしく面白く紹介するといふことは
決して徒勞でないと思ふ。しかも著者の希望によれば、更に進
んで之が多少とも讀者を裨益し、その發展のために資せらるべき
を願ふものの如くである。

筆者はさきに同じ著者の「古賀精里夫人」と題する小冊子——
それは本塾圖書館所藏の古賀家文書の一に基づいて記された小さ
な本で、僅か二十頁餘りのものでしかなかつたが、——を一見し
たときにもやはり斯うする著者の意向を感じたことがあつた。しか
しそれが本書にあつて一層著しいのは、本書のもつ性質の上から
も當然なことであるかも知れない。ともかく、今日兒童の讀物に
ついて最も議論のあるとき、この意味からも本書の意義は決して
尠なからざるものがあるであらうし、否そればかりか、興趣豊か
な讀物として大人の讀者をして必ずや、失望せしむることはあ
るまいと特に附言をしておく次第である。(本文二八六頁、圖版七
八)(會田倉吉)

Essai d'une histoire comparée des Peuples de l'Europe, par Ch-Seignobos (Paris, 1938)

シャルル・セニョーボス教授は一九三二年に Histoire sincère
de la Nation française—Essais d'une histoire de l'évolution

du peuple français. (英譯 Evolution of the French People,
by Catherine Alison Phillips, New York, 1932) を出して、
多大の反響を呼び、(史學 十二卷四號 書評参照) 本國でも非常
なる歡迎を受けて最近四十數版まで重ねたが、今回は右のフラン
ス史に於ける方法を一般歐洲諸國民史に應用したもので、同様の
獨創的考察を以て貫かれてゐる。著者の方法と抱負が如何なるも
のであるかを知るために、左に序文の概略を譯述してみる。

『著者の Histoire sincère de la Nation française がフラン
スに於て歡迎を受けたことは、著者を勵まして更に大膽なる計
畫に向はしめた。自分は一卷の中に、最古の時代より現代に至る
ヨーロッパ全民族の歴史を統合すべく努めた。

歴史を研究し、教授するに費された六十年は、自分をして、そ
の間に、ヨーロッパの全民族を、その歴史の全時期に於て比較す
る機會を與へた。その比較は、一國或は一時期の研究を専門とな
す史家には知られざる、彼等の生活の共通の特色を認めしめた。
それには類似してはゐるが、獨立の事情より起つたものと、一
民族の創造になるものより模倣せるものとの區別がある。

こゝに比較せんとしたるものは、特殊史の主題たるべき、住民
の諸種の生活状態であつて、自分は、それらが如何にして變化し
て來たかを、二種の異なる變化の原因、即ち、獨立の諸事實の同
時的統合(例へば戦争、侵入、革命など)と、先在の諸事情より秩
序に従つて由來せるもの(權力の發展、技術の進歩、宗教、制度
の傳播など)とを區別しつつ、説明せんと努めた。これらすべて
の變化は、人の行爲の所産である。しかし行爲そのものは、人々

の熱望、信仰、知識、過去の記憶により導かれたものであり、自分は結果の敘述のみに満足せず、たとへ表面に現はれずとも動機を示すことにより、行爲を理解せんと努めたのである。

自分は研究をなほ記録や史書の大部分を占むる少數の特權階級に限らず、知る限り一般住民の生活状態を敘述せんと努めた。實際生活の状態を比較せんとしたるが故に、形式的制度や法律規定でなく、政治宗教實際生活に於ける眞實の慣行を敘述せんとした。事實の選擇に於て、自分の準據したる原則を述べるならば、先づ、主要部分を與へたものは、政治的事件及び制度、戦争、革命、政府の行動である。大戦は、政治が、如何にして民族の全生活に影響し、他の全活動を支配するかを教へた。また最近の經濟史的研究の業績により、農業、工業、商業、技術的進歩に就いて大いに述べることを得た。次に、社會組織、經濟、政治の事情による階級の區別、物質生活の状態、習慣、家族、所有權の法などを綜合して、社會的と稱し得る事實を取扱つた。精神生活の題下に於ては、人々の行爲を支配せる精神活動、即ち宗教信仰、道徳觀念、教育によつて生ずる理想、近代に於ては政治的綱領、科學的知識などを含ませた。文學・藝術に於ては、一般的特質及び各時代に於ける主要な流派を示すに限つた。自分は、有益な比較を與へる諸小民族に就いて、充分な餘地を與へざりしこと、またすべての民族に於ける生活の主要關心事たるべき衣食住の日常生活、家庭生活、社會關係、娛樂につき多くの敘述をなさざりしを遺憾とする。

生活の一般状態の比較をなすことは、總體的敘述のみを適當と

するが故に、歴史の觀物たりし個人の活動の劇的事件、詳細なる敘述の美趣を避けた本書は、眞の性格と史的事實の連關にのみ關心をもつ讀者を目標とせるものである』と。

以上によりて明かなる如く、前著フランス史と同様に本書に於て用ひられてゐる方法は、從來の政治史、文化史、乃至は社會史、經濟史のいづれにも該當せぬ獨特の見方であり、いはゞそのすべてを綜合して、國民の生活の實相を史的發展の考察により明かにせんとするものである。著者の淡々たる飾り氣なき敘述の中に、廣汎なる事實が壓縮せられ、最も要領良き概觀が與へられ、しかも老練の史眼を以て、如何なる事實と雖も、全體の發展と聯關の中に考察されてゐる。眞に著者の如き、學殖と教授の經驗を以て始めて能くし得るところであると思ふ。本書に於て試みられた諸民族の比較といふ方法は、比較そのものに左程の重點が置かれてゐるのではなくして、たゞ文化の發展を明かならしむるため、諸民族の特性と貢獻が注意されたのであり、全體としてはやはり綜合的なるヨーロッパ史である。前著と同じく、第一章はヨーロッパの國土と住民の總體的觀察であり、著者の堅實なる史觀を窺ふに足り、つゞいて、ギリシヤ、ローマ兩民族とその文明の比較より、中世に入つて、最も詳細に諸國の制度、文化を論ずる、この部分が特に獨創的で、最も生彩ある記述と思ふ。用語の豊富な歴史の説明は、隨所に現はれ、本書の重要な特色をなし、興味が深い。中世以後の部分も、諸國の政治、社會組織、文化發展の特色を綜合し、一貫せる敘述の方法を以て通されてゐる。

要するに本書は、内容の重要な興味のみならず、史的方法と

しても注目すべきものである。前著と同様に、同一譯者の手にな
る英譯 The Rise of European Civilization, New York, 1938.
が出てゐる。(本文四八六頁、價二十五フラン) (平山榮一)

各國植民史及植民地の研究

(大鹽龜雄著
巖松堂發行)

今日我が國は大陸政策に乗り出して着々東亞の新秩序を建設し
つゝあり、また歐羅巴に於てもドイツは舊植民地の返還を要求し、
イタリもまた地中海に於てチユニス、ユルシカを要求して國
際政局に一波瀾を巻き起したが、これらの事象と關聯して、今や
植民地問題が世界的大問題として根本的に再検討されんとする
とき、先づ過去に於ける諸國民の植民活動を發展的に辿り、今日に
見るが如き植民地が如何なる史的發展の結果であるかを認識する
ことは最も緊要であつて、今茲に大鹽氏多年の研鑽が「各國植民
史及植民地の研究」と銘打つて上梓されたことは寔に時宜を得た
ものとして欣快に堪へざる次第である。本書は古代のエジプト、
ギリシヤ、カルタゴに筆を起してスペイン、ポルトガル、オラン
ダの活動時代に及び、更に第十九世紀を主として、フランス、イ
ギリス、ロシア、ドイツ、ベルギー、イタリ、アメリカ合衆國、
日本と順を逐うて各國別にその植民活動を敘述し、その航海發
見、植民開發の經過、更に各植民地の現状に就て詳細な説明を施
したもので、菊版、九ポイント組、五百餘頁の大著であるが、そ
の敘述の整然たるは感歎すべきであり、如何なる部分に就てみて
も極めてよく纏りがついて居り、而も説明に不明瞭な點のないこ

とは聲を大にして推稱し得ると思ふ。然し何と言つても本書の取
扱つてゐる時代は古代から現代に及び、而も世界の凡ゆる植民國
家と植民された凡ゆる地方を網羅するものであるが故に、その各
部分が極めて深い研究であるとは言はれ難いが、この種の文獻の
殆ど皆無である我が學界に於ては貴重な收獲であると言はざるを
得ない。只だ一つ二つ慾を言へば、非常に多くの地名が出て來
て、一般の讀者には地理的理解が頗る困難のやうに思はれるが、
もう少し多くの參考圖を挿入して讀者の便に供してほしかつた
と思ふ。また挿入されてゐる地圖の中に明瞭を缺くものが少なから
ず目にとまつたが、もう少し明確な圖版の作成が出来なかつたの
か、著者が地理學にも造詣が深い筈であるが故に特にこの點を希
望する次第である。更にまたこれ程の力作にして索引の缺けてゐ
るのはどうした事であらうか、責任ある研究書には索引を附する
といふことは一般の常識であるのに著者がこの點を閑却された
とするならば甚だ手落であると言はねばなるまい。願はくは重版の
際、右の如き缺點を除かれん事を希望する。尙ほ全體からみて古
代中世が極めて簡略であつて如何にも物足らないが、もう少し詳
細な研究の結果が附加されたならば完璧な植民史となることは疑
を容れない。然し斯かる瑕瑾にも拘らず、本書が堂々と世に問ふ
べき大著であることは勿論であつて、歴史學徒はもとより、一般
讀書人の一讀すべきものとして推獎する次第である。(定價、四圓
八十錢)(有賀春雄)